
とある男の不幸な事故

大嘘憑き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の不幸な事故

【Nコード】

N1359Z

【作者名】

大嘘憑き

【あらすじ】

アニメ トに行く途中だった主人公。しかし、いきなりの腹痛に倒れ、死んでしまったら訳の分からないところにいた。その時であった神にリリカルなのはの世界へ送られた。「いやっほー!!」と意気込んだのはいいものの、他に転生者はいるわ、能力は欠陥品んだわ、もう散々だ。しかも、訳の分からん喋る宝石まで現れて!どうなる俺の人生!

この小説はキャラ崩壊などが激しいため、苦手な方はバックして下さい。

この小説は不定期です。完結するかわかりません。

プロローグ（前書き）

お久しぶりです。大嘘憑きです。
今回は続くかわからないけど頑張ります。
ではどうぞー！！

プロローグ

ありきたりないいつもの光景。中学ぐらいの男子がなぜか発育のいい空見町の女子の胸を見て興奮している。

そこには羽の生えた女の子がいてその周りはいつものにぎやか。そんな光景が続いていた。

俺は高校2年だが、そんな俺からしてみても微笑ましい光景だと思う。

俺は今日、アニイトにいくため電車に乗った直後だった。

「いたっ！」

いきなりの腹痛。そのまま俺はその痛みに苦しみながら意識がブラツクアウトした。

思えば今日食べた賞味期限3年過ぎのチーズがいけなかったかもしれない。そんなことはないと思っていたがあつたようだ。思いゆく中で俺はそつと意識を手放した

起きろ

声が聞こえてくる

起きろ！

まただ。今度ははつきりとした

「はっ！」

俺はその声に跳び起きた。

『お主。アレを食べて死んだのはお主か？』

「あれって……あのチーズですか？」

『そつだ。やはりお主だったか……』

「死んだって……おれやはり駄目だったのか。残念だ」

『お主がアレを処分してくれたのか……ならわしがお主を生
き返らせてやるっ』

「え？」

『能力を一つだけやるっ。さあ言っが良い。』

俺は言われるまま能力を適当に言っ。それは俺が持っていたユウ・
クリウッド・ヘルサイズのカードを見たときだった。

「じゃ。このカードのキャラが使っている能力で……」

『わかった。では次に世界選択だ。お主にはある世界に行ってもら
っ。』

「ある世界？」

『いけばわかる。ではな』

そつして俺の第二の人生が始まった。

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします

第一話 理不尽(前書き)

では、本編の方をどうぞ！

第一話 理不尽

結果からいいます。確かに転生はできました。親は何故かいなかったけど、そして俺はこの世界に来るとき決めたことがある。

「俺はハーレムを作る!!!」

そんな時期もありました。

しかし実際に能力を試しに使うと頭痛で2、3日休まないと行けなくなる。

って言うか……この能力……欠陥品じゃねえ？

そんなこんなで聖祥小学校に入学。実際に原作キャラに会ってきた。しかし既にそのキャラには彼氏的存在（転生者）がおり一度は勝負を仕掛けてみたところボロ負け。

まあ実際には変装した俺がなのはたちに喧嘩を吹っかけてだけど……

まあ相手の能力が俺が手に入れた能力よりもはるかに強いわけです、瞬殺された。

そんなことにめげず俺はいつものように学校に登校したのだった。

「おはつよー！みんな 元気か!!!」

これがいつもの俺のキャラだ。しかし反応が帰って来ない。みんな俺のことざいやらキモいやらの視線を送ってくる。

多分俺はいじめというものに遭っているのだろう。

それを確信付けたのは今朝のことだった。いつものように登校して下駄箱に靴を入れて上履きをはこうとする。はこうとした瞬間

痛みに襲われた。俺は直ぐに上履きを脱ぎ捨てると中には画鋏が大量に入っている。

幸いにもすぐに脱ぎすてたため痛くはなかったが、普通の人をよそおるため保健室へ直行。これは悪ふざけが過ぎるということだ。先生にちくつた。先生も対処してくれようとしたが、犯人は捕まらず、何故か俺は浮いた存在となった。

どうして？

多分これが行けなかったのだらうな。保健室に行った後平然と登校。いつもと変わらぬ挨拶。うん完全にいじめにきづいていない雰囲気だ。

ある日のことだ。またいつものように登校していると殺人鬼に襲われたり飲酒運転の人がひき逃げをしようとしていたり、学校に行くと花束が机に置かれていたり、廊下に出たり、教科書がなくなったり、ありもない罪で万引き犯扱いされたりした。

それでも俺はあきらめない！！

そう俺は誓ったのだ。しかし事態を一転させた出来事があった。ある日の放課後。クラス合同体育のことだ。先生は少し職員室に行つて来るといいそこから出て行つた。

「おい。直樹。なんでおまえまだ学校にいんの？」

少しがたいの良い男子だ。

「は？何って？そんなこと言われる筋合いはないな」

すると他の人達からもいろいろと言われた。全て同学年だ。

「さっさと死ねばいいのに」

「あんたの顔なんか見たくないの」

「ほら帰れ帰れ!!ここはお前の居場所じゃねえ。いやこの世界にお前の居場所はねえよ」

今の言葉はまじイラつときたがそんなことに動揺する俺じゃねえ。平然とする

「俺の人生だ。お前らには関係ない話だろう。」

「関係あるんだよ。特にお前の顔が一番気に食わねえ」

なにこのいじめ?昔聞いたことがある言葉を行ってみよう。

「いじめかつこ悪いよ」

「はあ〜何言つてやがるてめえ」

そういつて殴りかかってきた。俺はその殴りをよけもせずを受けた。そしてよろつと立ち上がる。

「はあはあはあ。なぜ殴つた。」

「はあ?殴られて当然だろう?お前が悪いんだから」

次に女子どもにボールを投げられた。しかも原作キャラまで混じっている。どうして?

しかもなぜかボールに混じって魔力弾が飛んでくる。……………
……………普通当たつたら死ぬレベルだぞ?

俺はボールに当たり倒れなんとか魔力弾をよけた。

誰かが舌打ちするのが聞こえた。確信犯だなこいつ。

「痛てえ。はあはあはあ。」

それ以外発する言葉がなかった。そして一人がどけという合図を送った瞬間。俺に向かって一本の槍が飛んできた。それは正しく転生者が放った槍『ゲイボルク』。確実に心臓を貫く技だ。俺は痛めている身体を無理やり起こし、それをよけた。だがやりは追ってくる。俺が

もうだめだ。と思ったときだった。

「お前ら！なにしてる！！」

いきなり教師が現れた。俺はそれから意識を手放した。

目が覚めると病院の一室だった

隣には俺を助けてくれた教師。男性。がいた。

「俺は助かったのか……………」

すると教師は俺に向かってこういった

「今回はお前が悪いのか？」

は？なにこいつ？この現場見て俺が悪いって？はは泣きたなるねえ

「あの場にいた奴らは全員お前が悪いって言ったがどうなんだ？」

「……………」

俺は無言で返す。はつきり言って返す言葉がなかった。俺が何と言

ったところで信用してくれるかわからない。しかも同学年全て敵だぞ！！！

「まあいい。落ち着いたら話してくれ。」

そう言って去っていった。

退院後

人目を避けて病院の近くの森を抜けるためそこを通った。ちなみに俺がいるのは現時点で小学4年生AS終了後だ。

「ああ。どっかに俺の人生を変えてくれるものが落ちてないかな」

そう言った瞬間頭痛に苛まれ、あたりが暗くなり意識を落とした。

第一話 理不尽（後書き）

直「さてさてやってきたぜ俺の時代!!」

作「何を言っているんだ？」

？「そうですね。まあ次からは私が活躍しますけど・・・」

直「お前の活躍なんてねえよ!!」

？「そうなんですか？」

作「・・・さあ？」

直「おい!ちゃんと答えろよ!!」

作「・・・」

？「・・・」

直「どうして二人とも無言!!」

作「さあて、無駄にハイテンションな馬鹿は置いて・・・」

直「・・・おい。今馬鹿って言わなかったか!？」

？「そうですね。じゃあさっさと終わりますか。」

直「お前にまで無視された!？」

作「では次回で！」

直「無視するんじゃないかねえ！！！」

第2話 22個目のジェルシード？（前書き）

新キャラ登場！！

さてさてどうなる？主人公の運命は！？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
は？

「なあ聞きたいことがあるんだけど・・・・・・・・」

「なんですか？」

「お前ってジェルシードだよな？」

「そうですね？」

「ジェルシードって喋るの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
あっ」

いきなり喋らなくなった

「ってもう遅いからね！喋っているから・・・・・・・・それに俺の
願いは叶えられたのかな？」

「それはあの平凡がなんとか？っていう話ですか？無理です。自分
で叶えて下さい。」
まさかのリアルアドバイス！！宝石にここまで言われるとは思って
なかったよ！！！！

「それはそうとして・・・・・・・・」

話を流された！！！！

「あなたが私の主ですね？」

「は？なにをいつているんですか？」

「私の封印を解いてくれたのがあなたです。よってこれより彼方に従います。」

何故？しかもこれってロストロギアだよ。これ所持してる時点で
おれ一種のロストロギア不法保持者だよ。次元犯罪者
まっしぐらな人生じゃねえ？

「嫌だ。俺はもつとまともな人生を送りたいんだ！」

そういつてジェルシードを投げ飛ばす。そして家へ直行した。
家に帰ると絶句。なんと家が……。……。火災に合っていた。
そしてポケットに違和感があった。それはあのジェルだった。

「全く。いきなり投げ飛ばすなんてダメじゃないですか。」

これはおそらく念話だろう。頭に響いてくる。

「なんでお前がここに……！」

「それはですね。一度契約したものは死ぬまで私と一緒にですよ。」

ということは何って結局犯罪者になるしかないのか？

『まあそういうことです』

心読まれた……！

理不尽だ。しかしなぜ家が燃やされているのだろう？
その理由はすぐにジェルが教えてくれた

『それはですね。多分あの子たちにせいだと思います。』

見ると原作キャラが慌てている。なのは達だ。

『たぶん訓練中に偶然攻撃が当たったと思われます。どうします？』

『なあ理不尽なこと多くね？俺なにかした？』

『多分そういう運命なのでしょう。ご冥福をお祈りします。』

・・・・・・・・・・・・・・・・あの中には俺のだいじなものがいっ
ぱい入っていたな。具体的に言うと今まで集めた色々な物達・・・・・・・・
最悪だ。

俺はその場で泣きわめいた。あたかも普通を装って。

「誰だよ。こんなことした奴は・・・・・・・・あそこには俺の
俺の両親の写真や遺品があるんだよ。返せよ。俺の家を返せ！！！！
！！！！」

周りを気にせず絶叫。さすがに気の毒だと思ったのだろう。周りは
俺を慰める言葉をかける。
そして消防車が到着したのは家が完全に燃え尽きた後だった。

「殺すころすコロス殺す。こんなことした奴全員殺す。コロシテヤ
ル！！！！！！」

あたりを気にせず、逃走した。

多分原作キャラはここまでなるとは思ってたのだろう。これは一種の縛りだ。これから彼女たちは忘れることができないものとなるのだろう。

森に戻った俺は一応領主に許可をとり………ていうかこの森じたい俺の森だったので家を建て、そこで暮らすことにした。あの放火事件以来俺は学校に入っていない。

家にはゲームと、たたかえるようにジェルと練習する場所だけ。空腹は頭痛を追ってまで空腹感がないことにした。

ゲームに没頭する毎日。それから俺とジェルが会って1年が過ぎた。

どうやらジェルは人間にもなれるらしい。魔力を消費するけど……誕生日を祝ってやろうと思えば最近噂の翠屋。にいこうと決意した。別に原作キャラがいようがいまいが関係無い。

これが俺の人生だから。

そして気がつけば翠屋前

カランカラン

「いらっしやいませ！」

現れたのは多分高校2年ぐらいだろうの歳の人。通称剣道女。

「誕生日を祝いたいです。ケーキをくれませんか？」

ほぼ実際は俺が食べるけど……一応あいつと出会って一年だ。お祝いぐらいしてやろう。

「少々お待ち下さい。」

そういつて俺は窓を眺めながら待つことにした。すると後ろからいきなり声をかけられた。

「大丈夫か？」

それは若い男だ。たぶんこのひとが月村の姉と付き合っているエロゲ主人公の恭也さんなのだろう。

「なにがですか？」

「いやなあ。君の雰囲気は普通の人とは全然違う意味で危ないと思っただけだ。」

「そうですか……………」

俺は暗い雰囲気と言う。

「ちょっとついてきてくれないかな」

言われるがままにいついて行った。

少しすると道場らしき建物に入った。

どうしてこんなところに連れて行くんだ？と思ったが気にせず見た

「どうしてこんなところにきたんですか？」

「どうしてだと思っ？」

「わかりません。俺……………もうそろそろ帰らないといけな
いんで……………」

「ちょっと待て。話してくれないか……. どうして君がそうなったのか。」

話したところでどうなるんだ？と思ったが自然とどうなったのかが口に出てしまった。気付けば泣いていた。いつぶりだろう？最後に泣いたのは1年前の火災の時だ。

「すみません。取り乱してしまいました。
・ありがとうございます。」

お礼を言い金を渡してその日はまっすぐ家に帰ったのだった。

「ただいま」

「お帰りなさいマスター。顔色がよくなってますよ。」

「まあな。ジェル。明日から俺また学校いこうかな。」

「どうしてですか？」

「このままじゃ父さんや母さんに顔向けできないじゃん。」

「それは良い心がけです。私は反対しません。」

快く納得してくれたジェルに俺はまた泣いた。俺って本当に弱いなああと改めて思ったときだった。

第2話 22個目のジェルシード？（後書き）

作「それにしても災難だったな。お前」

直「そうだよ。なんで俺だけこんな運命なんだろうな・・・」

ジェ「それは作者が意図的にやっている以外ないと思いますよ？マ
スター」

直「そうなのか？作者・・・もう少しは改善してくれ、俺の人生」
作「無理です。」

直「即当！？何で！？」

作「だってそのほうが面白いからですね。」

ジェ「ああ。その意見なら私も賛成します。」

直「ジェルまで！？どうしてだ・・・」

作「それは・・・」

ジェ「この物語のタイトルが・・・」

作「& amp; ジェ」とある男の不幸な事故だから（笑）
直「・・・」

作「まあ話が進めば考えてもいいですけど・・・」

直「ホントか！？」

ジェ「ええ。話が進めばですけど・・・」

直「そうか・・・なら俺頑張るよ！」

作「（バカでよかった。）そうですね。じゃあ次回でお会いしまし
よう。」

直「俺の活躍を楽しみに！！」

第3話 帰ったきた学校。(前書き)

直「ククク。今日から学校・・・ワクワクするな!!」

ジエ「どうしてですか?」

直「それは・・・友達がいるから?」

ジエ「あれ?マスターって友達いないんじゃないですか?げんにいじめられてたし・・・」

直「うゝうるさい!と、とりあえず友達一人ぐらい作ってやる!!」

ジエ「それじゃあ頑張ってください」

第3話 帰ったきた学校。

翌朝。

聖祥小学校の制服に身を包み学校へ向かった。
教室の前に行くとなんか何人かの生徒は来ているようだ。
俺は意を決して1年前までしていたいつものように学校に入った。

「っはははは。ようみんな俺は一年ぶりに帰ってきた!!!!!!」

入った瞬間沈黙。

多分俺のことなんて忘れていたのだろう。
だがしかし、これから何があるかと俺は学校に行くこと決めたのだ。

「あれ〜どうしたの？みんな反応薄いぜ。ほら1年前見たいにつかかってこいよ。」

「.....」

「さあ今日から俺の新たな一日が始まるぜ。今日から俺が主人公だ!!!!!!」

思いつきりぶつちやけます。これ相当はずいけどやるしかない。
チャームがなり席についた。俺が来ていたことに驚いた教師もいたが、何よりクラス全体の雰囲気重かった。

幸いにもクラスにはなのはと転生者2人は休みでラッキーと思ったが油断したら原作キャラとイレギュラーに殺される。

あまり近づかないようにしよう。うんそうしよう。

「弁当ってやっぱり屋上が一番だよな」

『全く誰に向かって言っているんですか？』

『ここにいる全生徒にだよ』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

一人で弁当を食っていると一人の女子が俺の元にやってきた。この
こもしかて・・・・・・・・俺に気があるのか？

「何でまた登校してきたのよ。気持ち悪いから喋らないでくれる？」

「これは俺がいたとき学年2位だったアリサさんどうしたの
？」

「それがむかつくのよー!!」

どうやら怒っているらしい。まっ俺の怒りに比べたらたいしたこと
ないだろうけど。

「それで？なにか用？自称学年1位さん？」

「あんだねえ。」

「それなら今度のテストでかけようよ。今度のテストで俺があんた
に負ければ俺は学校に来ない。もう。しかし、俺が勝てば、あんた
は俺と付き合う。結婚を前提にして・・・・・・・・どうだ？」

「そんなの乗るわけないでしょう!!!」

うーんあとひとおしだな。あの杉崎君に出来て俺にできないわけないからな。美少女ハーレム。」

「負けるのが怖いのか？それでもあの家のお嬢様なんだな。負け犬家か。ははははくくく」

どうやら怒りが頂点に達したらしい。かなり来ているようだ

「なら勝負よ。私が勝ったらあんたは出ていく。私が負けたらあんたの言うこと何でも聞いてあげるわ。」

「ちよっ！アリサちゃん。いいのそんなこと言って!!!」

「大丈夫よすずか。あたしが負けるわけないじゃない。」

そういつて食い下がった。テストは来月。それまでにテスト範囲を勉強だ!!!

こうして俺はアリサ。(美少女)を手に入れる為にもう勉強が始まったのだった。

この勝負は瞬く間に学校中に広がった。アリサを勝たせようとするために妨害工作に走ったモノもいたが、アリサがそれを阻止。

どうやら真剣に勝ちたいようだ。妨害はできなくなり、それからみんな見守った。

そして結果当日。みんなが期待している中、発表された結果は。 . . .

まず5位 田中 雄平。(転生者) 95点

あまりの嬉しさに叫んだ

「いよっしゃあああああ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

」

「そんな」

「嘘だろ……………」

ふと後ろを見るとみんなして泣いていた……………

これ俺が悪役じゃねえ？

「アリサちゃん……………」

そう叫んだのは月村さんだ。さすが親友思いなだけある。

「約束だ。」

俺はこの場の空気をぶちこわす発言をして、来週の土曜日デートに誘った。

それを渋々承諾し、この場はお開きになった。

家に帰ると爆睡した。はっきり言って1日3時間は子供ににが重い。そっとうわけあって睡魔に襲われたのだった。

第3話 帰ったきた学校。(後書き)

ジエ「・・・何かマスターがいじめられていた理由・・・わかる気がします・・・」

直「どうしてだ!？」

ジエ「・・・気づいてないんですか?マスター?」

直「・・・ん?」

ジエ「自覚ないんですか・・・。(流石は私のマスター。予想以上の馬鹿でした。)」

直「おい!今馬鹿って思わなかったか?」

ジエ「いえいえ。ソナナコトアリマセンヨ?」

直「そうか。ならいいんだが」

ジエ「それにしても作者遅いですね。」

直「あああいつなら先に帰った。なんでもやらなきゃいけないことが山積みらしいから。」

ジエ「どうせ、マスターのせいなんでしょうけどね。」

直「それより、もうそろそろお開きだ。残念だが今日はここまで。」

「ジェーンでは次回お会いしましょう！」

第4話 デートとゲーセンと本当の理由（前書き）

直「いえーい、今回もやってきましたこのコーナー！」

ジエ「そうですね。マスター。別に何もやってないのにこのテンション。さすがマスターですね。」

直「まあ褒めるなよジエル。」

ジエ「（別に褒めてませんけどね・・・）それよりこのタイトルはなんですか？」

直「なんか作者が思い・・・いやなかなか、タイトルは別に関係ないんだ」

ジエ「危ないところでしたね。マスター。」

直「そうだな。危ないところだった・・・だが！本編を見てくればわかる人もいるかもしれん。なら早速本編に行きますか。」

ジエ「行ってらっしゃい！」

直「お前も行くんだよー！」

第4話 デートとゲーセンと本当の理由

次の日学校に行くと原作キャラとイレギュラー達が勢揃いしていた。何故イレギュラーとわかったかというところ、みんな俺と違い莫大な魔力を秘めていたからだ。

俺はいつもどおり挨拶し自分の席につく、そしていつもと変わらぬ本『科学の神秘と魔法使い』といういまどき珍すぎる本を読んでいた。

ちなみにページ数は350ほど。すると後ろから声をかけられた

「おい。お前。」

振り向くと男がいた。とりあえず無視という方向で

「おい！きいているのか！！」

「俺は男には興味無い。阿さん宜しく！！」

俺は携帯から阿部さんにメールを送るとすぐきてくれた。あの音楽と共に。

『やらないか。やらかいか やらかいかい』

後の方で絶叫していたのが聞こえたけど無視の方向で。なんで知っていたかという話は長くなるからダメだ。

「あのう〜ちよっといい？」

次はなんとあの原作キャラ主人公の高町　なのはさんでえす！！すげえ！！ボールぶつけられたときはこんな奴だったんだ・・・・・・・・

と
絶望していたがまじかで見ると可愛いな。ぐへへへ。おつと涎が出かけたぜ

「なに？」

さすが俺。ここはクールに答える。

「その・・・・・・・・・・・・・・・・し・・・・・・・・」

おどおどしている。しょうがない話を変えよう。

「ちょっといい？この本の話なんだけどさ・・・・・・・・魔法がもしあったとしたら君は人（俺）を攻撃できる？何も罪もない人。ただむかつくだけって言う理由でさ」

たぶん相当混乱しているのだろう。昔のことがあるもんな。

「それはそのう・・・・・・・・」

「俺もね。退院後家に帰ったらね。火災あつてたんだよ。それが何も無いところから出た。魔法みたいだね。それで俺の家族の遺品が・・・・・・・・思い出が全てなくなっただ。・・・・・・・・ああ。あるにはあつたな。一つだけ。形見だけど。これをなくしたら本当に俺はおかしくなるかもな。誰がやつたんだろう？俺の家を燃やした犯人。・・・・・・・・」

俺はそういつて目を向けた。原作キャラ達は何故かビクッ！として
いる。

「どうしたの？顔色が悪いよ？」

「な、なんでもないよ」

「そうなの？保健室へ行ってきたら？」

「だからなんでもないの」

「ふん？で？話って何？」

どうやら完全に忘れていたらしく後でねと言われた。

放課後 また呼び止められた。

「なに？高町さん？それに俺のことをクズしか思っていないその他。」

「それは……………ごめんなさい……………」

いや！ここは否定してくれよ。俺泣いちゃうぞ。本当に泣いちゃうぞ。

「で？用はそれだけですか？ちなみにアリサさんの件はあっちも承諾済みだったので変えることができますよ？」

「そんな……………」

「きみは優しい友情で人のプライドを気づつけるきかな？そんなのは本当の友達なの？」

俺が思いっきり攻めているとうしろからまた声が聞こえた。

「こつこつ奴に付き合わせないのも本当の友達だ。」

「これはこれは守君。でも、君達は最低な人間だっことを忘れてはいけない。昔のことは結構根に持つタイプの人なんですよ。俺。というわけでさよなら。」

そうして帰っていた。その後姿は何か寂しさを感じたという。

日曜日。

今日はあの……あの……あの！アリサさんとデートの日だ！
！テンション上がるぜ！……！

『五月蠅いです。マスター』

『って！なんでいるんだよ！……！』

『それはですね……一応見張りですよ。貴方達についてくる数名の魔力反応があります。おそらくあの高町とか言う人のものだ』

『そうか……だが気にせずいこう！……！』

『流石マスター。立派です』

駅前

そこには一風変わったベンツが止まってあった。その中から聖祥の制服らしきものをみにつけた生徒が現れた。どうやら俺に私服を見られたくないらしい。少し思考して声をかける。

「おっは〜。今日も可愛いですね。」

「べ、べつにあんたなんか言われたくないわよ」

ぐはっあ！！なんて威力だ。俺死ぬる

『マスター大げさですよ？どうせ俺を倒しても第2第3の俺が……
……なんていうんでしょ？』

『どうしてわかった！！』

どうやら主人公は単純だったようだ。

「じゃあ行きますか。」

「どこに行くのよ。」

「俺の好きな場所かな。」

そうやって俺が連れて行った場所はプラネタリウムだった。ここは知るひとぞ知る場所だ。休日なのに俺達しか来ない。

「ここは……プラネタリウム？」

「そつだよ。」

そして星の神秘を堪能した後、ゲーセンへよった。

「ああ。五月蠅い!!」

「だってここはゲーセンだからね。何のゲームからやる？」

そう聞くとどうやら前々から興味があったクレイジーゲームや音楽ゲームを選択した。どうやら楽しんでいただけたようだ。

こんな姿が学校でも見れたらいいのと思ったのは俺だけだろうか？
気が付くとすでに5時近くになっていた。帰り際に俺は駅まで送っていこうと話しながら言った。

「ね？今日は楽しかった？」

「どうして……その……」

「ん？人間やっぱ笑顔が一番だと思うんだ。その魅力に俺はいいと感じる。例えいじめられようとも汚されようとも、笑顔を捨てなければきつと素敵な人生を送れると思う。」

「素敵な人生？」

「そう。それが俺であり、俺そのもの。俺から笑顔がなくなるときはきつと……」

それ以上の言葉はでなかった。いや出せなかったのだらう。どうやらその言葉を考えるまでには至らなかったのだらう。

「じゃあね。また今度。」

そう言って俺は去っていった。

第4話 デートとゲーセンと本当の理由（後書き）

ジエ「マスターかつこいいですよ!」

直「……」

ジエ「きつと思いついたら赤面ですね」

直「頼むからやめてくれ。」

ジエ「マスターがそう言うなら……まあ録音器の方は既にダビングしてネットに……」

直「おい!お前何ネット公開とかしようしてんの!」

ジエ「いやいや。マスター。もうすでにやっていますよ?」

直「俺道すら歩けなくなった!?明日学校行くとどうせみんな見てくるだろうな。」

ジエ「いいじゃないですか!普段だったらあんまりいてもいなくても同じ人が次の日には有名人みたいなことを体験できるんですよ?」

直「それはいじめの対象になっていなかった暗い超能……嫌なんでもない。」

ジエ「今すごく気になる言葉ができませんでした……まあいいでしょう。今回は長話しすぎました。」

直「そうだな、下手したら本編より長いんじゃないか？」

ジエ「いいんですよ。そのところは。ではマスター最後の締めを
！」

直「え！俺にふる？・・・みんな！また次回出会おうな！」

第5話 ミスと否定と次元犯罪者？（前書き）

ジエ「マスター！いよいよこのタイトルの本編的ものがありますよ？」

直「……………ああ……………」

ジエ「どうしたんですか？そんなに暗い顔して？」

直「見ればわかるよ。」

ジエ「そうですか……………ならマスターが沈んでいる理由を本編で見てくださいー！！」

第5話 ミスと否定と次元犯罪者？

あのデートの日から数日後俺はいつもと変わらず登校していた。

同学年の生徒とは未だにうまく行ってないが、それなりに充実した生活を送っている。

だがこの束の間の平和は長くは続かない。

それはある日のことだった。

「はあ〜今日も一日疲れたな〜」

と家にてジェルを眺めていた時だ。

「でも、本当にジェルシールドは22こあるんだな。知らなかったぜ」
無防備でそういうことをほざいているとチャイムが鳴った。

こんな山奥に来る人が誰だか知らないがもの好きもいるもんだと思
い、扉を開けてみる。

「はい。今開けます。」

「こんにちは」

ばたん。

なんかさ。

原作キャラたちがさ俺の家の目の前にいるんだ………どうして？もう一度確認してみる。

まだいる。

どうやら俺に会いに来たようだ。はっきり言って来るな！！と叫びたい。

だつてろくなことにならないもん。

『マスターどうします？』

『まずどうしてこうなったかだな』

『多分だと思えますけど………管理局の人工衛星スパイロボにさっきの会話が聞こえてたりするかもしれないね。』

『そんなわけないだろう？』

するとまたチャイムが鳴った。

「ああうるさいな。なんですか？って言うか休日まで俺をいじめにきたんですか？それでもあの高町家の人間ですか？って言うか休日ぐらいゆっくりさせる！！！」

思いっきりほざいた。どうやら迫力に負けて言葉が出ないようだ。

「で？何しに来たの？用がないんだつたら帰ってきてくれる？めんどいしうざい。」

これが家での俺のスタイルだ。学校とは大違いなのだ。ははは
実際原作キャラがいるからです。

「それはその……………」

「うちらはちょっと用があるんよ。入ってもかまへん？」

なんで？

「嫌だよ。そんなの……………部屋散らかってるし……………それによく知らない人を部屋に入れちゃいけないって死ぬ前に母さんが……………」

ちなみにこの世界に母さんは存在してませんよ。父もそうですが……………

「……………はやて　なのは　やっぱりやめよう？」

フエイト

君は素敵だ。

「それもそうやな……………単刀直入に聞くけど、君は魔道士なん？」

いきなりそんな発言来た！！しかし今はちょっといじめに耐えている普通の子なので普通の反応をしよう。

「ちょっと待っててね。」

懐から携帯を取り出し連絡する

「もしもし。精神家ですか？ちょっと頭がおかす」

全部言おうとしたところで携帯を折られた。理不尽だ!!

「何言ってるの!?!」

「だっておかしいじゃん。いきなり魔導師とか。頭打ったの?それとも実は初めから電波系?」

あくまでしらを切る。すると念話が聞こえた。

『マスター言い過ぎですよ?一応美少女ですけど……』

いや!間違えなく美少女ですよ!!

『ならどうして拒否するんですか?』

『おれがこのままこいつらと付き合いいたら……全力全壊で周りの奴らに消されるからな』

『流石マスター!自分の状況ぐらい分かっていたんですね』

この宝石……捨てたろうか?

『嫌ですね。捨てたところで帰ってきますよ』

……

「あ!そうだ!ねえお母さんのかたみ見せてくれない?」

「なんで?俺はもう失いたくないよ。たったひとつのかたみだもん。」

「大丈夫だよとらないから。」

「目が笑ってないよ？」

本当に目は笑ってなかったのだ。

「なのはちゃん。やっぱり家宅捜査を……………」

「もしもし、警察ですか？不法侵入です」

「だからまた！！！」

いや当たり前だろ！！普通おかしいし、って言うか俺の家を知っていることに驚きだよ！！！！

「ねえなんで俺の家がわかったの？もしかして俺の家を燃やした犯人？」

「違うよ……………たぶん……………」

いやたぶんって何！！今明らかにおかしい単語が聞こえた

「はあ〜見せてもいいよ」

「ほんとー！！」

「ただし条件がある！！」

「条件？」

俺が条件があるというところをかしげた。あらかわいい。じゃなくて

「簡単だよ……高町さんの彼氏とハラウンさんの彼氏、八神さんの兄を……殺してくれるならね。」

どうやら目付きが変わったようだ。どうしよう？

「ははは嘘だよ。そんなことするわけないじゃん。でもこれは大切なものなんだ。例えば見せたところでやらないし、もしその後君達が取ったと判明したら高町さんの家を燃やすだけだから。」

笑って冗談を言う。まあ実際は冗談じゃなかったりもする。

「なんで私だけ!!!」

と聞こえたような気がするが無視に限る。

「はいこれ。」

そういつてジェルを渡す。ちなみにわたしたところどこいつは帰ってくるので安心できる。

「わぁ綺麗!!!」

など絶対小学生が言いそうにない言葉を発言していた。どうやら念話を使っているようにも見える。

「いいな。欲しいな。これどこで売ってるん？」

やはりきたか。このあと数年したら管理局の狸って言われていたのはこの頃からだと今わかった気がした。

「これはもう売ってないんだ。」

「そうなん？でもやっぱりキレイやわ。……………これ売ってくれへん？」

よしてきた。売ろうかなこれ。どうせ帰ってくるんだし

『マスター完全に詐欺師になろうと思ってますね？』

『ああ。そういえばどうして俺これ売って金稼ごうとしなかったのかな？』

『馬鹿ですね。しかし今回は駄目ですよ。封印されたら私の人生終わりですから。』

『お前を持ってたら俺の人生の方が終わりだよ!!!』

『ならこうします。』

そういつていきなり魔法陣が現れた。いきなりの出来事に両方戸惑う。そして俺はまた、意識を手放した。

なのはサイド

今日はこの付近に最近現れたというロストロギアを回収するという作業があります。今回は私、フェイトちゃん、はやてちゃんの3人でこの任務を当たります。……君達は別の任務が入っているので……

それより今日はクロノ君から説明を受けるところです。

「来たか。」

すると後ろから黒い服を着た少し格好いい男の子が入ってきました。

「義兄さん!!」

「「クロノ君」」

「今日は最近発見されたと思われるロストロギアが君達の街にあるとの情報が入った。」

「私達の街に?」

「ああそうだ。そしてそのロストロギアを所持しているという少年がいるとの情報も。」

「誰なん?それ?」

はやてちゃんが聞いている。

「それは君達の小学校の生徒しかも同級生とまで出ている。」

それは予想を斜め上に行ったところだった。なんと私達と同学年に

いるのだから。

「その子の名前は……不動 直樹という少年だ。」

その言葉を聞いた瞬間私達は戸惑った。不動 直樹。その少年は一年間学校にはこず、最近来たと思っただけでアリサちゃんとデートをかけた勝負までした人。そして私たちが昔いじめていた人でもあった。流石にそれは私も戸惑った。はやてちゃん達も戸惑っているようだ。不動 直樹。みんなから本当の心『レイジングハート』と言う二つ名までもらっていた人。学校の嫌われ者。でもその発端は誰も知らない。

ただ顔をみたらむかつくというだけでいじめられそのいじめに耐えつつ学校に来ていた存在。それが彼だった。

そして私たちが近付きたくない理由はまだある。それは一年前のことだ。私達は魔法の練習をしていて、少し砲撃のミスをした。しかしそれは違う所に行き一軒の家を壊した。それが彼の家だった。それから何があつたのか覚えていない。そしてそれから1年学校にこなくなつた。

それもそうだ。家がなくなり、親が死んでいて、その遺品も焼かれたのだ。普通の人だったら耐えられない傷。それを1年で克服した。まあ話は長くなつたが、彼だけにはもう関わりなくなつた。しかしこれも任務だ。私達は渋々承諾した。

「どうする？なのは？私あんまり近付きたくないよ」

「うちもや……あんなことしてもうたしな……」

「みんな同じ気持ちなの。でも頑張つて行かなきゃ」

そういつて私達は無理にいった。家は人工衛星スパイロボの情報に

より探し、やっと森の中で一軒家に出会った。私達はチャイムを鳴らした。

「はいはい誰ですか？」

その返事はなかなか早かった。しかし、開けた瞬間なぜかしめられた。

またチャイムを鳴らし続ける。

「ああうるさいな。なんですか？って言うか休日まで俺をいじめにきたんですか？それでもあの高町家の人間ですか？って言うか休日ぐらいゆっくりさせろ！！！！」

多分これが彼が言った（私達に）はじめての本音だろう。

「で？何しに来たの？用がないんだったら帰ってくれろ？めんどいっついでいい。」

多分思いつきり何かをしていた途中だったのだろう。なぜか切れているの

「それはその……………」

「うちらはちょっと用があるんよ。入ってもかまへん？」

ナイスだよはやてちゃん！！しかしそう簡単には行かなかった。

「嫌だよ。そんなの……………部屋散らかってるし……………それによく知らない人を部屋に入れちゃいけないって死ぬ前に母さんが……………」

よく知らない人って言われた！！確かにそうだけど……
同じクラスなのに……

「……………はやて　なのは　やっぱりやめようっ」

フェイトちゃんが止めてくる。

『なんでなの。フェイトちゃん』

『多分何言ったって無理だよ。それより聞いてみよう？ロストロギアの事？』

『それもそうやな』

「それもそうやな……………単刀直入に聞くけど、君は魔道士なん？」

はやてちゃん！！それはやすぎ！！しかもみたところ私達になんか暖かい目を向けてきている。なんか嫌な予感がするの

「ちょっと待っててね。」

懐から携帯を取り出した。そして……………

「もしもし。精神家ですか？ちょっと頭がおかs」

バキ　いつの間にか私は携帯を取り上げ壊してしまった。

「何言ってるの！-!-!」

「だっておかしいじゃん。いきなり魔導師とか。頭打つたの？それとも実は初めから電波系？」

普通の人ならこういう反応するのもおかしくない。本当に普通の人なのかな？

「あ！そうだ！ねえお母さんのかたみ見せてくれない？」

私は学校で言っていた事を思い出し、訪ねてみる。もしかしたらそれがロストロギアかもしれないの

「なんで？俺はもう失いたくないよ。たったひとつのかたみだもん。」

「大丈夫だよとらないから。」

「目が笑ってないよ？」

このとき私は初めて自覚したと思う。演技は私に向いていないとここではやてちゃんから提案を受けた

「なのはちゃん。やっぱり家宅捜査を……………」

「もしもし、警察ですか？不法侵入です」

「だからまた！！！」

でもそれはさすがにダメだと私も思った。勝手に上がるのはいくら何でも許されないと思うの……それより何本携帯電話もってる

の？

「ねえなんで俺の家がわかったの？もしかして俺の家を燃やした犯人？」

するといきなり質問してきた。確かに彼の家は近所の人は誰も知らなかったし、先生だって知らなかった。これはどう考えてもおかしい。

しかも、私たちがしたことも知っているかのようにだ。

「違うよ。……………たぶん……………」

私達は弱気で否定した。すると彼は諦めたようでこつこつことを行ってきた

「はあ〜見せてもいいよ」

「ほんとー!!」

「ただし条件がある!!」

「条件？」

私達はその条件が聞きたかった。しかし帰ってきたのは最悪の条件だった。

「簡単だよ……………高町さんの彼氏とハラウンさんの彼氏、八神さんの兄を……………殺してくれるならね。」

それは私達にはどうすることもできないもの。でも彼は真剣な目で
見ている。すると彼はいきなり態度が変わった。

「ははは嘘だよ。そんなことするわけないじゃん。でもこれは大切
なものなんだ。例え見せたところでやらないし、もしその後君達が
取ったと判明したら高町さんの家を燃やすだけだから。」

なんだ冗談か………驚いたの。でも………

「なんで私だけ!!!」

そして私たちにそれを渡した。どうやら魔力を持っていたようで間
違えないらしい。でもこれを奪うとなると話は別になる。もし私た
ちがとつたら私の家は明日にでも火事になってそうで怖い。

『どうする？なの？』

『どうしよつか？はやてちゃん。』

『ここぞうちにぶらんといて？』

『無理だよ。ここは腹g………頭のいいはやてちゃんの出
番だよ』

『いま腹黒って言おうとせんやった？』

『まあまあ。それよりもどうする？』

『売ってもらったほうが早いんちゃう？』

『流石ははやてちゃん。やっぱり腹黒だね。』

「いいな。欲しいな。これどこで売ってるん？」

「これはもう売ってないんだ。」

「そうなん？でもやっぱりキレイやわ。……………これ売ってくれへん？」

そして少し考えているようだ。しかし次の瞬間だった。いきなり魔法陣が現れ私達。彼も戸惑っている。その瞬間かれはどこかへ消えていった。

そして彼の家が跡形も無く消え去ったの出会った。これをみていた管理局員の人が計画犯と見て取り上げ、彼はD級次元犯罪者となったのだ。

第5話 ミスと否定と次元犯罪者？（後書き）

直「・・・これで俺も次元犯罪者か・・・」

ジエ「マスター、気を落とさないでください。」

直「だけど・・・」

ジエ「マスターは死なない限りどうせ次元犯罪者になるんですから
！！！」

直「俺の人生全否定！？それはお前が勝手にやったことだろ？」

ジエ「でも望んだのはマスターですよ？」

直「クツ！否定できない！！！」

ジエ「これから始まるストーリーは私達にとって壮絶なものとなる
かもしれない
ね。」

直「そうだな。なら次で俺たちがどうなったか確かめてみるか・・・」

ジエ「はい！！じゃあ次回で！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1359z/>

とある男の不幸な事故

2011年12月9日01時01分発行